

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32696

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11017

研究課題名（和文）保健師による虐待予防のための介入方法の開発に関する研究

研究課題名（英文）Research on the development of intervention methods for abuse prevention by public health nurses

研究代表者

松尾 真規子（Matsuo, Makiko）

駒沢女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：10301706

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：乳幼児の養育者を対象に、インタビュー及び質問紙調査により、保健師に対する援助要請の促進要因を検討した。また、養育者のパーソナリティ特性としてアタッチメント・スタイルに着目し、援助要請との関連における調整要因の検討を行った。そのプロセスの中で近年援助要請を促進すると言われているセルフ・コンパッションにも着目し、セルフ・コンパッションが調整要因となり得るか検討した。さらに独自尺度を開発し、アタッチメント・スタイルと援助要請及び養育者の内省機能との関連における調整作用を検討した。今後の虐待予防につながる保健師としての養育者支援の姿勢、心理教育等、介入への示唆が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

乳幼児の養育者の保健師に対する援助要請の促進要因及び養育者のアタッチメント・スタイルと援助要請との関連、アタッチメント・スタイルと内省機能との関連における調整要因を明らかにした。今後、援助要請に消極的な不安定なアタッチメント・スタイルの養育者に対する支援のあり方及び母子保健における心理教育等に示唆が得られた。

研究成果の概要（英文）：I examined the factors that promote help-seeking for public health nurses through interviews and questionnaires with caregivers of infants. In addition, I focused on attachment style as a personality trait of caregivers and examined moderating factors in relation to help-seeking. In the process, I also focused on self-compassion, which is said to promote help-seeking in recent years, and examined whether self-compassion could be a moderating factor. Furthermore, I developed an original scale and examined the moderating effects in relation to attachment style, help-seeking, and parental reflective functioning. Suggestions for future interventions, such as attitude toward support for caregivers as a public health nurse and psychoeducation, which will lead to abuse prevention, were obtained.

研究分野：精神保健看護

キーワード：保健師 アタッチメント・スタイル 乳幼児 養育者 援助要請 セルフ・コンパッション 内省機能

1. 研究開始当初の背景

我が国の年間の児童虐待対応件数は過去最多を更新し続けている。平成 29 年には改正児童福祉法が施行され、家庭支援の強化、すなわち虐待に至る前の予防的観点が重要視されている。また、子育て世代包括支援センター設置の全国展開が目指され（平成 27 年少子化社会対策大綱）、妊娠期から子育て期への切れ目のない継続的支援が望まれている。我が国では従来、行政の母子保健施策において保健師が活動してきた。妊娠届の受理から乳幼児期にかけて一貫して関わることができ、リスクをいち早く発見できる立場にあり、地域の保健師には虐待予防において重要な役割が益々期待される場所である。

我が国の母子保健活動のうち、乳幼児健診の受診率は 95% を超える高さを誇る（平成 28 年度厚生労働省、地域保健・健康増進結果報告）。また、平成 21 年度より児童福祉法に位置付けられた乳児家庭全戸訪問事業も全国の 94.7% の市町村が実施している。しかし、同事業で対象家庭全てに訪問できている市区町村は 52.7% にすぎず、訪問拒否家庭への対応が課題となっている（厚生労働省乳児家庭全戸訪問事業の実施状況調査）。すべての家庭が必要な時に支援を求めたり、支援を届けられる検討を進める必要がある。

2. 研究の目的

乳幼児の養育者の保健師に対する援助要請を促進する要因を探索的に検討する。また、養育者の対人関係の基盤となるアタッチメント・スタイルと援助要請との関連における調整要因を検討し、保健師の養育者支援における示唆を得る。

3. 研究の方法

2018 年 6～8 月、保健師 9 名と養育者 10 名を対象にインタビューし、保健師に対しては、新生児訪問にて養育者が支援を受け入れるために配慮している言動、養育者に対しては、安心できた保健師の言動について聴取した。そのインタビュー内容を KJ 法に準拠して質的に分析した。

その結果から、独自尺度を開発し、2019 年 11 月、関東地方にある保育園・幼稚園・認定こども園計 3 園に依頼し、質問紙および返信用封筒を計 500 部配布した。返信用封筒を用いて個別に郵送にて回収、統計的に分析した。

また、新生児訪問だけではなく、継続的に家庭訪問を受けている養育者 12 名に対して、2023 年 1～2 月、オンラインにて半構造化面接を行い、そのインタビュー内容を質的に分析した。

2022 年 6～7 月、0～6 歳の子どもを主たる養育者 300 名に対して質問紙調査を実施し、アタッチメント・スタイルと援助要請との関連における調整要因の検討を行った。

また、養育者の内省機能を測定する PRFQ (Parental reflective functioning questionnaire) について原著者の許可を得て翻訳し、日本語版を作成、2022 年 8 月、0～5 歳の子どもを養育者 300 名（男性 150 名、女性 150 名）を対象に質問紙調査を実施、その信頼性・妥当性の検証を行った。また、質的調査から独自尺度を作成し、2023 年 10 月、0～6 歳の子どもを養育者 200 名（男性 100 名、女性 100 名）を対象に質問紙調査を実施し、その信頼性・妥当性の検証を行った。PRFQ 日本語版と、作成した独自尺度を用いて、2023 年 10 月、0～6 歳の子どもを養育者 200 名（男性 100 名、女性 100 名）を対象に質問紙調査を実施し、調整要因の検討を行った。

4. 研究成果

(1) 保健師の家庭訪問における言動と援助要請との関連

保健師 9 名と養育者 10 名を対象にインタビューした結果、養育者が支援を受け入れるために配慮している保健師の言動として、【ニーズに沿った支援】【脅威を与えない対応】【育児に対する肯定的なフィードバック】【孤独感の緩和】【肯定的な感情を伴う態度】の 5 つの大カテゴリが、養育者が安心できた保健師の言動として、【ニーズに沿った支援】【あたたかみや優しい雰囲気】【保健師の自己開示】【非指示的な姿勢】【母に対する気遣い】【育児に対する肯定的なフィードバック】の 6 つの大カテゴリが抽出された。

それらの結果から独自尺度を作成し、養育者の新生児期の家庭訪問の体験と援助要請との関連を質問紙調査にて検討した。178 名の有効回答が得られ、階層的重回帰分析で検討したところ、①保健師による「ニーズに沿った支援」と、養育者の家庭訪問に対する肯定的な感情及び保健師の「相談への信頼」との間に関連があり、その後の援助要請を促進する可能性があること、②保健師による「意見の押しつけ」と、養育者の家庭訪問に対する否定的な感情及び保健師の相談が「侵害性」があると捉えることとの間に関連があり、その後の援助要請を抑制する可能性がある

ことがわかった。さらに、訪問前の抵抗感が高い群に対して保健師から「肯定的フィードバック」を行った際、さらに「遠慮」を高めることがわかった (Figure 1)。そのため、養育者の特性も考慮した検討が必要であると考えられた (母性衛生 62 巻 4 号に掲載済)。



Figure 1 「遠慮」に対する「訪問に対する抵抗感」の高低群における「肯定的フィードバック」の単純傾斜

(2) 養育者のアタッチメント・スタイルと援助要請との関連

養育者 300 名に対して質問紙調査を実施し、養育者のアタッチメント・スタイルと援助要請との関連において、近年援助要請を促進すると注目されているセルフ・コンパッションの調整効果について検討した。その結果、「親密性の回避」が高い女性の場合、「自分への優しさ」で専門家への援助要請を「遠慮」するという結果が得られた (Figure 2)。また、「見捨てられ不安」が高い女性の場合、「過剰同一化」、すなわち苦痛に満ちた思考や感情に過剰に同一化する傾向が低い群では「遠慮」を高めていた。さらに、「親密性の回避」が高い女性の場合、「マインドフルネス」が低いと、専門家の相談を「侵害性」があると感じる傾向にあることがわかった (母性衛生 64 巻 4 号に掲載済)。

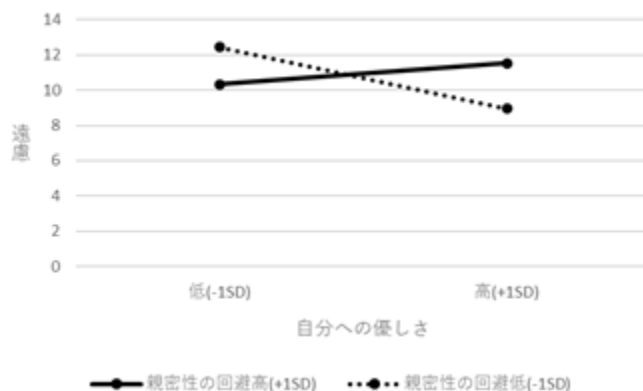


Figure 2 「遠慮」に対する「親密性の回避」高低群における「自分へのやさしさ」の単純傾斜

(3) 養育者の援助要請と内省機能に及ぼす調整要因の検討

養育者 200 名に対して、PRFQ 日本語版及び質的研究から作成した独自尺度を用いて質問紙調査を行い、養育者のアタッチメント・スタイルと援助要請及び内省機能との関連における調整要因を検討した (今後、学術雑誌に投稿予定)。

以上の成果より、援助要請に消極的な、不安定なアタッチメント・スタイルの養育者に対する支援のあり方や、母子保健における心理教育に対する示唆が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松尾真規子、安藤智子	4. 巻 62(4)
2. 論文標題 新生児期の家庭訪問で養育者が受けとめた保健師の言動と援助要請との関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 母性衛生	6. 最初と最後の頁 627-637
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾真規子、安藤智子	4. 巻 64(4)
2. 論文標題 乳幼児の養育者のアタッチメント・スタイルと援助要請との関連におけるセルフ・コンパッションの調整効果の検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 母性衛生	6. 最初と最後の頁 627-635
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松尾真規子、安藤智子
2. 発表標題 新生児期の家庭訪問における保健師の言動と養育者の援助要請との関連
3. 学会等名 日本母性衛生学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------